

# 質的研究の多様性を教える —ポートレチャー法の紹介を通じて— Teaching Qualitative Research in its Multiplicity: Introduction to Portraiture Methodology

宮崎 あゆみ MIYAZAKI, Ayumi

- お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所  
Institute for Global Leadership, Ochanomizu Women's University
- 国際基督教大学教育研究所  
Institute for Educational Research and Service, International Christian University

**Keywords** 質的研究法, ポートレチャー法, 調査枠組み  
qualitative research methods, portraiture, research frameworks

## ABSTRACT

本稿の目的は、質的研究法の特徴を明確化し、質的研究法の重要な試みの一つであるポートレチャー法を紹介することで、日本においてメインストリームとは言えない質的研究法のティーチングの発展に貢献することを目的とする。本稿では、まず、質的研究法の特質について整理し、質的研究法が、インタビューや観察等の質的なデータによって規定されるものではなく、人々の意味構築や実践のプロセスを問う「how」の枠組みに規定されることを明確化する。次に、「質的」枠組みの意味するところを考察する材料として、教育を初めとした広い領域で近年注目されているポートレチャー法を紹介する。ポートレチャー法とは、方法的トライアングレーションから得られた、文脈に即した厚い記述を基に、現実の複雑性、ダイナミズムや矛盾を捉える手法である。その手法は、社会科学の伝統的な表現方法に挑戦し、芸術と社会科学の境界を問う試みであり、「質的」の意味を考える上で示唆に富んでいる。

In this article, I aim to contribute to the teaching of various types of qualitative research - which is still not viewed as a mainstream method in Japanese social sciences - through dissecting the features of qualitative research and introducing “portraiture methodology.” First, I will explain that qualitative research is not determined solely by the quality of its data, but also by its framework and its “how” questions for exploring the processes of peoples’ meaning constructions. I will then introduce “portraiture methodology,” a widely

respected methodology in many disciplines (including education), to think about what “qualitative” really means. Portraiture methodology combines various qualitative methods and pursues triangulations in various forms to obtain a thick, contextual documentation of complex, dynamic, and contested human experiences. It challenges the traditional ways in which social sciences represent reality, and incorporates artistic means to capture complex human experiences. This attempt to blur the boundaries of arts and sciences offers abundant suggestions about how to understand the meanings of “qualitative.”

## 1. 質的研究法の枠組み

### 1.1 質的研究法とは？

質的研究法と銘打った授業を行う時に、最も困難な課題は、質的研究法とはそもそも何かについての理解を導くことである。質的研究法は、インタビュートランスクリプト、観察ノート、あるいは文書資料等、質的なデータを用いた研究方法であるという理解が最も一般的であるが、質的研究法の本質は、因果関係モデルでは説明しきれないプロセスを問うその枠組みにある。

欧米では、1980年代以降、研究者が民族史を書くことの政治性・信頼性についての議論が盛んに行われ（例えば、Marcus & Fischer, 1986 = 1989, Clifford & Marcus, 1986 = 1996）、インタビューの仕方、フィールドノーツの付け方や分析の仕方などの方法論の議論が盛んに行われて厚く蓄積され（例えば、Merriam, 1998 = 2004, Emerson, Fretz, & Shaw 1995 = 1998）、質的研究の方法論が精鋭化されてきた。欧米においては、信頼性の高いデータと分析を示す努力が広範に行われた結果、「質的方法は恣意的だ」「質的方法は量的方法の補助に過ぎない」「一般化できないのでは意味がない」というような批判は聞かれなくなった。ある研究の解釈が恣意的であるとすれば、それは方法論自体の問題ではなく、研究の質の問題なのだという認識が共有されるようになったのである。

日本においても、質的研究の手法に関する多くのテキストが出版され、方法論についてのディスカッションが発展してきている。しかしながら、質的研究の本質およびその豊富なバラエティに関して議論したもの（例えば、北澤・古賀, 2008）は、多くないように思われる。本稿では、まず、質的研究の枠組みについて明確化し、次に、欧米で発

達してきた多種多様な質的方法の一例としてポートレイチャー法を紹介することで、質的研究法のティーチングへのヒントを提示したい。

### 1.2 質的研究と量的研究の違い

質的研究法の初回の授業で明確化するべきは、データだけに留まらない質的研究法と量的研究法の様々な角度からの違いである。一口に質的研究と言っても、観察研究、インタビュー研究、会話分析、ナラティブ研究、ライフヒストリー研究など、様々な領域の様々な方法論や理論に依拠しており、下記（次頁を参照）のような対照表による説明は、単純化した理念型であることを最初に断っておきたい。

冒頭で述べたように、質的研究と量的研究の違いは、データの種類だけではなく、その枠組みや問いにある。その最も顕著な違いは、質的研究は過程理論（process theory）に、量的研究は変数理論（variance theory）に依っているということである（Maxwell, 1996）。量的研究は、要因間の関係を問う。例えば、生徒たちのジェンダー観と学校タイプは関係しているという仮説を立て、生徒が進学重点校（A）に通っていれば、非伝統的なジェンダー観を形成する（B）ことが多いという、AとBとの要因間の関係の強さを結論として導く（東京学芸大学教員養成とジェンダー研究会, 2013）。それに対し、質的研究は、要因間の関係を問う仮説ではなく、特定の文脈の中で、出来事のプロセスや、人々の意味付けを明らかにしようとする「how」を問うリサーチクエスションを核とする。例えば、質的研究では、どのように進学校で女子生徒たちがジェンダー観を形成しているのか、というリサーチクエスションを基に調査を進めることになる。質的研究のクエスションは、

表1 質的研究と量的研究の相違点

	Variance Theory (変数理論) ≈ 量的研究	Process Theory (過程理論) ≈ 質的研究
枠組	要因とその(因果)関係を調べる	出来事とその過程, 意味, 文脈を調べる
リサーチクエスト	Whether 明確な仮説	How 調査対象によって調整できる応用の効く広いクエスト
調査	Top-down — 演繹	Bottom-up — 帰納
データ収集	一回 (あるいは複数回)	継続的
サンプル	多数 ランダムサンプリング	少数 理論的サンプリング
データ分析	数量化	文脈化

(出所) Maxwell, J. A. (1996). *Qualitative research design: An interactive approach*. Thousand Oaks, London, New Delhi: Sageなどを基に作成。

調査協力者たちがどのように(how)物事を進め、考え、経験し、意味を構築しているのかというプロセスを緻密に検討して、そこで見えてくる人々の論理を理解するためのものである。要因の関連ではなく、意味構築とプロセスが問題になるのである。

量的枠組みに依る研究は、既存の理論によって、研究者が予め設けた仮説に依って演繹的に行う。それに対して、質的枠組みは、フィールドで起こる出来事や相互交渉から帰納的に分析を行うものであり、データの収集と分析のプロセスで、リサーチクエストは姿を変え、発展を遂げる。プロセスを問う質的調査は、調査自体がプロセスであることができる。

質的研究の批判として、「一般化できない」ということがよく聞かれる。しかし、多くの質的研究の目的は、「一般化」にはない。量的調査は、仮説の有効性を広く証明するために、なるべく偏りのないサンプルを取るランダムサンプリングを行う。しかし、質的調査は、知りたいことが最も分かる、つまりリサーチクエストに最も理論的に適合するサンプリングを取る理論的サンプリングを行う。

例えば、「ジェンダーの非伝統的な価値観を形成する要因は何か」を追求する量的研究であれば、

様々なタイプ-親の社会経済文化階層、本人の学校タイプ、学校との関係や学業への態度、仲間集団との関わり等-の生徒をカバーするサンプルを確保し、生徒の異なる要因がどのようにジェンダー観と相関しているのかを分析していく。ランダムにサンプリングすることで、親の学歴が高いほど生徒のジェンダー観が非伝統的である、進学校であるほどジェンダー観が非伝統的であるなどの仮説が検証できることになる(東京学芸大学教員養成とジェンダー研究会, 2013)。

一方、質的枠組みでは、知りたいことを絞ったリサーチクエストに沿って、それに理論的に適合したサンプリングを行う。例えば、進学校において、女子生徒たちがどのようにジェンダー観を形成し、葛藤を経験しているのかに関心があれば、進学校の女子生徒にインタビュー調査を行うことができる。また、生徒たちが仲間集団との関係の中で、どのようにジェンダー観を形成しているのかに関心があれば、学校におけるエスノグラフィを行うことで、生徒たちのジェンダー観の形成過程を見ていくのが一つの方法であるといえる。質的な方法をデザインする時には、どれほど一般化できるかではなく、どれほど調査の目的、リサーチクエスト、および方法に整合性があるかによって、その成否が決まるのである。そし

て、理論的にサンプリングされたフィールドは、その文脈の中で分析される。それに対し、量的枠組みは、脱文脈化された要因の繋がりを数量化して分析する。

### 1.3 質的／量的枠組みとデータとの関係

前項で説明したように、質的研究の特徴は、データの種類ではなく、枠組みであり、リサーチエスションの立て方であり、サンプルの仕方であり、分析方法にあるといえることができる。従って、質的データを使用したからと言って、必ずしも質的枠組みの質的研究とは限らないということになる。例えば、観察やインタビューなどの質的な方法を用いて収集されたデータでも、数量化し、文脈から離れて要因と要因との相関を分析する調査は、枠組みとしては、量的研究であるといえることができる。

例えば、筆者の行った女子高校でのジェンダー・サブカルチャーの研究(1993)では、女子高校において、女子生徒たちが「一般グループ」「勉強グループ」「オタクグループ」「ヤンキーグループ」というグループに自らを分類し、学校や学業への態度、制服の着方、女性性の表現の仕方などの側面で異なったジェンダー・サブカルチャーを形成し、お互いに評価し、差異化し、パワー争いをしながら、異なった女性性を形成している様子を描いた。この研究は、女子生徒たちのジェンダー・サブカルチャーの差異を分析した部分においては、枠組みは量的であると言える。制服を着崩せば着崩すほど、学校への態度は反抗的であり、伝統的な女性性から離れた女性性を形成しているという分析は、データは質的でありながら、要因の関連を分析する量的研究に似ている。他で論じたように(宮崎, 1998)、それは、既存の量的な生徒文化研究に影響を受けた演繹的なアプローチであったといえることができる。それに対し、女子生徒のそれぞれのサブカルチャーを基盤にしたパワー争いのプロセスや、女子生徒のサブカルチャーやジェンダー観への解釈過程を分析した部分の枠組みは、女子生徒たちの意味形成や、生活世界のプロセスを帰納的に描いた質的なもので

あったといえることができる。

下記(次頁を参照)の図は、データと枠組みとの組み合わせの関係を表している。マクスウェル(1996)は、データが質であって、枠組みも質であるものを、質的研究(Qualitative Research)の頭文字を取って、Big Q、データが質でありながら、枠組みが量的なものを、Small qと呼ぶ概念を紹介する。Big QとSmall qとを分けて認識することで、調査のタイプを正確に理解し、デザインすることができるという。

以上に述べた質と量の違いは、理念型に過ぎない。質的方法を用いて因果関係を説明することを目指す議論や(例えば、Maxwell, 2004)、質的方法と量的方法を組み合わせた混合方法(mixed methods)に関する議論(例えば、Creswell & Clark, 2010)も盛んになり、質的研究と量的研究は、それぞれの特徴を生かしながら、共に発展を遂げているといえる。

## 2. 「質的」とは何か?: ポートレイチャー法を手がかりに

### 2.1 ポートレイチャー法の特徴

前節では、質的研究の特徴は、特定の文脈の中での意味構築のプロセスを描く枠組みにあることを説明した。本節では、質的研究法の新しく創造的なアプローチであるポートレイチャー法を紹介することで、「質的」枠組みの意味を理解する手がかりを提供したい。尚、ここにまとめるポートレイチャー法に関する説明は、ローレンス・ライトフットとデイヴィスがポートレイチャー法のテキストしてまとめた『ポートレイチャーの芸術と科学(The Art and Science of Portraiture)』(1997)、および『質的探求(Qualitative Inquiry)』のポートレイチャー法の特集号(2005)に依拠する。

ポートレイチャー法とは、教育社会学者であるローレンス・ライトフットが1980年代初めに考案した質的研究法で、近年、教育に留まらない多くの領域の研究者が広く使用するようになり、2005年には、質的研究法を論じるメジャーなジャーナルである『質的探求(Qualitative Inquiry)』

## データ

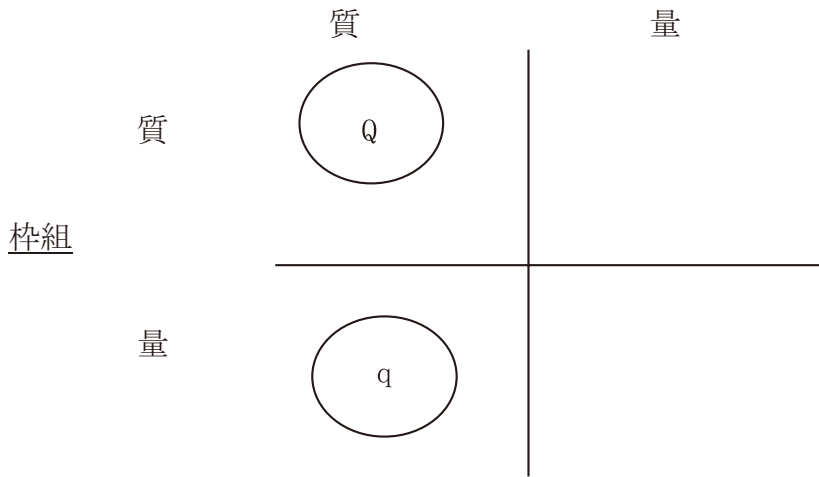


図1 データと枠組みとの関係

(出所) Maxwell, J. A. (1996). *Qualitative research design: An interactive approach*. Thousand Oaks, London, New Delhi: Sageを基に作成。

で特集が組まれるまでに発展した。ポートレイチャー法という名前は、ローレンス・ライトフットが肖像画 (portraiture) のモデルになった経験から、芸術のように現実の複雑なニュアンスを捉えることができるような社会科学的手法について考え始めたことに由来している。ポートレイチャー法とは、その由来のように、芸術と社会科学の境界を問うことと同時に、調査者と研究協力者、学問と素人の常識、などの様々な境界を切り崩す試みである。

ポートレイチャー法の第一の特徴は、文学の豊かな表現方法を、社会科学の厳密性と合わせることである。芸術と科学の融合は、社会人文科学の領域で歴史的に脈々と続いてきた試みである。例えば、臨床心理学の分野では、サックス (1985) が、19世紀に隆盛した「人間の豊かな臨床物語」としての科学とナラティブの融合を再興することを提唱した。また、ウィリアム・ジェームズやジョン・デューイといった著名な学者たちも、芸術と社会科学の融合について議論していたという。

このような伝統を踏まえながら、例えて言うな

らば、山の稜線を線で描く社会科学に対して、社会科学の厳密性を維持しながらも、山に色づけをし、周りの景色を描いていく文学の表現方法を取り入れる方法をポートレイチャー法の実践者たちは探求する。長期のエスノグラフィにインタビュー、過去の記録、歴史的物象、フィールド観察、シャドーイングなどを組み合わせた、方法的トライアンギュレーションから得られた、文脈に即した厚い記述を基に、現実の複雑性、ダイナミズムや矛盾を捉え、日々のマイクロなプロセスの中に、社会科学的な理論がどのように表出するかを緻密に分析する。そして、このように社会科学の厳密性を維持しつつ、芸術的な表現方法を用い、物語のパワー (power of story-telling) を利用することで、社会科学と芸術の境界を定義し直すことを試みるのである。

ポートレイチャー法のもう一つの特徴は、研究者と調査協力者との関係が、伝統的な調査よりも平等で対話的であるということである (注)。ポートレイチャー法においては、研究者の立場は特権的なものではなく、研究協力者と同じ高さの目線

で研究に参加する。研究者は距離を置いた「客観的な」立場にいるのではなく、研究者のパースペクティブが調査の重要なツールとなっていることを明確に示し、研究者自身をも調査の一部として登場させ、描き、分析する。

また、ポートレイチャー法においては、人々の声を人々の視点から忠実に拾い上げ、調査が人々に寄与することを使命としている。例えば、ローレンス・ライトフットは、『グッドハイスクール(1983)』の中で、社会学研究が、人々の病理や問題にばかり焦点を当てていると批判し、問題ばかりが取り上げられがちなマイノリティの学校の成功例を6ケース選び、緻密にその実践を描いた。ポートレイチャーの手法は、マイノリティの学校の困難を統一的に面的に描くのではなく、「成功」にも矛盾や複雑性があることを豊かに描き出すことを可能にし、実践の転換を助けることになった。

ポートレイチャー法の表現方法は文学と社会科学の境界を問うものであると前述したが、その表現方法は、文学的であるだけでなく、難解な学術用語を避け、学界を超えて広く読まれるような平易なものである。しかし、平易な表現を用いながらも、社会科学的な価値を損なっていない。その逆に、日常的な言葉で語られながらも、社会科学の理論に切り込んでいく鋭さには驚かされる。ポートレイチャー法が目指すのは、「人々の学問 (people's scholarship)」であり、学問自体の発信の仕方をも問う方法であると言える。

## 2.2 ポートレイチャー法の例

ここで、限られた紙幅の中ではあるが、ローレンス・ライトフットのポートレイチャーの例として、『私は川を知ってきた (I've Known Rivers) (1995)』を取り上げたい。

米国では、アフリカ系アメリカ人は、白人化することなくして社会的な成功は収められないという考えが広く流布している。成功しているアフリカ系アメリカ人は、自分の家族や伝統を捨てて白人になるのだと批判される。自らもアフリカ系アメリカ人であるローレンス・ライトフットは、こ

のような根強い社会的偏見に対抗して、6人の成功したアフリカ系アメリカ人—哲学者兼牧師、刑事被告人の弁護士兼政治運動家、修道女兼化学者、疫学者兼精神科医、メディア起業家、ドキュメンタリー監督—のポートレイトを、2年に渡り、インタビュー、観察、シャドーイングを続けることで描いた。彼／彼女らはどのように自分たちの人生と親や祖父母との人生の違いを捉え、社会的に成功した裏で、どのように関係性を紡いでいるのか、どのように故郷あるいはコミュニティの喪失や罪の意識を経験し、それでも様々な葛藤や矛盾を乗り越えて、自分のルーツとコネクトしながら、社会に未来に貢献 (give forward) しようとしているのだろうか。

以下に、女性牧師のケイティについての記述の一部を抜粋する。ケイティは、アメリカ南部のノースカロライナ州にある粉挽き工場で働く黒人の町で育った。ケイティはその町から抜け出し、女性牧師となり、マサチューセッツ州ケンブリッジのエリート神学校の教授となる。黒人の貧しい町の大家族から、白人男性中心のアカデミックな世界に遠い旅をしたケイティの混乱と別離と融合の物語である。

(p17) ケイティ・キャンノンは、相手を射抜くような瞳と、大きなジェスチャーと、つられて笑ってしまうような大笑いが特徴的な、大柄の茶色の肌の女性である。私たちの1時のランチデートに、ケイティは、空腹を紛らすためにバナナを食べたといながら（電話でいつもは「12時ぴったり」に昼食を食べるのだと説明していた）、10分早く現れた。そして、いたずらっぽさを目に浮かべて、「これだけ太っているのは、努力のたまものなんですよ。これは自然にこうなる訳じゃなくて、この体重を維持するのは、あなたが思うよりずっと大変なことなんだから」と言った。

(p37-8) ケイティの家族は、実は比較的教養があった。家には図鑑のセットがあったし、彼女の母親と祖母は「読書家」だった。彼女たちは、「スーパーマーケットで見かけるような赤本、婦人家庭

誌など」の婦人雑誌を買って来て、角から角まで読んでいた。また教会から学んだ「宗教的なこと」に没頭したりしていた。けれども、町の黒人たちは、図書館に行くことは許されてはいなかった。それは、「法律違反だった」とケイティはあっけらかんと言った。「60年代半ばで、黒人は町の図書館には行けなかった。ローラースケートにも行けなかったし、プールにも行けなかったから、未だに泳げないんだよ。」

ケイティの話聞いていて、「図書館」に行く権利を奪われるという究極の剥奪に立ち止まらずにはおれなかった。ケイティは、私の顔に浮かんだ恐怖に対して、「でもね、移動図書館が時々来たんだよ。でも、黒人の側と白人の側があって、違う質の本だったのね。移動図書館が近所に止まると、私たちは本を借りたんだけど、祖母は、借りたままの状態ですぐに返すことにすごくこだわってね。それは、白人のコミュニティーに、私たちはまっとうな人間なんだっていうことを＜証明（prove）＞しようとする彼女の努力だったんだよ。つまり、移動図書館の黒人用の棚の二流の質の低いボロボロの本しか借りられなくても、黒人の価値や礼儀を白人たちに＜証明＞するために、借りたままの状態です返さなければならなかったということなのだ。本を愛する学者であり、教師であり、教育は「命を吹き込む源」だというケイティにとって、地域の図書館が使えないということ、「質の低い」本だけしか借りられなかったということ、借りた本の扱いで白人たちに黒人の価値を証明しなければならぬ状況に置かれたこと、そのすべてが、耐えられないほど抑圧的だったに違いない。それは、ケイティが今でも切羽詰まって熱く、「あの場所から心底出たかった、ノースカロライナから出たかった。思ったんだよ。どこかに「自分」でいられる場所があるはずだって」と語る理由の一つに違いない。ケイティは、家から7マイルしか離れていない大学に行ったが、固い決意があった。「教育はここを出るチケットなんだ。絶対に秀でなければ！」そして、彼女は言葉の通り秀でたのである。努力して勉強し、優秀学生リストに常に載り、トップに上り詰

め、彼女の価値を証明したのである。

(p100-101) (ケイティがニューヨークのエリート神学校のユニオン校で博士課程に入学した) この時ほど、「貧しいことの痛み」を深く経験したことはなかった。この「すごくエリート主義の」環境に到着するまでは、彼女の祖母の力強い訓練によって、貧しいことの苦しみから逃れることができていた。「祖母は、私が出た者でも、その存在に価値があるのだと教えてくれた。世の中に出た時に、祖母の励ましが、どんな困難に直面しても強く私を守ってくれた。でも、ユニオンでは、初めて恥ずかしいと思わずたづなになった」。

ケイティは例えば、セミナーのテーブルを囲む同期の学生たちの自己紹介を思い出す。学生たちの素晴らしい経験や真面目な態度、受けて来たエリート教育、恵まれた家族やキャリアの目的。最初の週のオリエンテーションで輪になって順番に10年後に何をしたいかを話したとき、他の学生たちは、本のシリーズを書くとか、哲学論を発展させるとか、次から次へと大風呂敷を広げていた。ケイティの順番になった時、彼女は疎外感を感じて気まずく、どのように彼女の心の痛みと欠損を隠せばよいのかと考えていた。ケイティは大声で、思わず「10年後は、西海岸でパーティーをしたい！」と口走っていた。誰も笑わず、気まずそうだった。その話をしているケイティは、昔の侮辱を思い出して、「間違いだった！間違いだった！私がしようとしたのは、皆のはったりを止めようとしたことだけだったんだけど。私が出身の全員が黒人の学校では、こんなもったいぶったことを言った奴がいたら、皆、「おいおい、現実をみようよ！現実をみようぜ！」って言っていた。」けれども、ケイティは、「ファンシーなお話」を遮って楽になりなかつただけなのに、その努力は裏目に出て、自分がただのうるさくて取るに足らなくて頭が悪い人間のように感じる結果になった。

この加入儀礼は、ケイティの深い迷いと疎外感との始まりだった。彼女は部外者であり、アウトキャストであり、何を言えばいいのか、何をすれ

ばいいのか、どこで何かを見つければいいのか、何に価値があって重要だと思われるのか、何も知らなかったのである。ケイティは、私の心に焼きつくような強い目力でこう言った。「サラ、白人文化や白人の教育文化について何にも知らなかったんだよ。一切、一切、一切ね。バンガラデッシュからの留学生だって、私よりも文化があった。周りの誰もが私より準備ができていた。それが私の痛みの強さの一つの原因だった。ここにいて、アメリカで生まれて、でも、白人の世界にということに何の理解もなく、変なタイミングで笑って、間違ったタイミングで話して、パーティに行けば、黒人はたった一人だった」

(p107) (中産階級の黒人たちにも、白人のフェミニストたちにも合わず、ジェンダーと人種の「淵」に落ちてしまう) ケイティが「淵」という言葉を使うとき、トラウマの深さがこだまし、中年になって、彼女が橋渡しをし、融合させようとした彼女の人生の中の大きな亀裂が映し出される。今、41歳のケイティは、様々な矛盾を見出し、それに名前をつけ、考え、融合し、全体像を描く方法を見つけなければならない。公的なペルソナと私的な自己、特権と貧困、アフリカのルーツとフェミニズム、白人文化権主義の教会法とケイティの教会法が、地殻変動を起こし始めている。ケイティは、和解は矛盾を否定したり、痛みを無視したりところからやってはこないことを知っている。もし和解が生まれようとしているならば、それは常に大小の妥協を含んだ脆いものなのだ。彼女は、いつも矛盾と一緒に生きていくことも知っている。調和は、矛盾を消し去ることからも、軽くすることからすらも生まれてこない。調和は、矛盾を抱きしめながら、矛盾の間を(中を)、目的を持って、優雅に、そして(ケイティのサバイバルスキルの一つである)ユーモアを持って渡ることから生まれるのである。ケイティはユーモアがたっぷりあることを証明するかのよう、排他的なユニオンの黒人組織を批判した。「あのね、彼らは私が持ち寄りパーティにキッシュとかヨーグルトとか豆腐を持っておくるんじゃないかって

恐れてたんだよね」。笑みがケイティの顔中に広がり、私たちは、昔のそして今の痛みを一緒に笑い飛ばしたのだ。

## 結語

社会的に成功したマイノリティがどのように差別を生き、どのように引き裂かれた自分のルーツと現在の地位を経験しているのか、というリサーチクエスチョンに対し、量的調査を用いれば、例えば、ルーツと現在の地位の矛盾の程度が、様々なバックグラウンドのマイノリティの間でどのくらい違うのかを明らかにするアプローチを取ることができるだろう。しかし、成功したマイノリティたちがどのように矛盾や調和を複雑に経験しているかという「how」のクエスチョンを量的枠組みで明らかにすることは困難である。

そして、ポートレイチャー法は、質的研究の中でも、矛盾の機微をつぶさに明らかにするのに向いている方法とすることができる。例えば、ケイティの祖母が移動図書館にどのように関わっていたかという日常の一場面から、人間の尊厳を奪う差別の深刻さ、そしてそれに対する人々の抵抗力が見事に浮かび上がる。また、ケイティ自身の葛藤の分析は、矛盾や調和が、研究者が思っても見なかったような多層性を提示しているということに気づかせてくれる。

「質的」というのは、このように何でもない日常的な実践の描写から、豊かな機微を掘り下げ、理論的な発見をしていくアプローチである。ポートレイチャー法だけに留まらず、様々な質的方法が、人間の複雑で矛盾に満ちた経験を捉えようと発達してきている。質的研究法を教える時には、質的方法は量的方法の補助ではなく、独特の枠組みを持つ独立した方法であることを強調し、その様々な試みが紹介されることが重要であると言える。

## 注

研究者と調査協力者との関係のあり方を問い直



す試みは、ポートレイチャー法に限らず、1980年代後半から、人類学を初めとして、広い領域で行われ、マイノリティ研究者たちがその動きに大きく貢献した（例えば、Villanas, 1996, Visweswaran, 1994）。量的枠組みを念頭においた、調査者の影響が少なれば少ないほど科学的であるというポジティブな考え方は、研究者と調査協力者の権力関係が暴かれるとともに、信憑性を失うこととなった。

現在では、研究者が透明人間になるという不可能な目標を掲げるよりも、研究者がフィールドにおいてどのような役割を果たしていたのかを公にして検討して行くことが重要であるという認識が常識となり、学位論文においても、研究論文においても、研究者の役割を分析した節を方法論のディスカッションに含めることがスタンダードになっている。

## 引用文献

- Clifford, J., & Marcus, G. E. (1986). *Writing culture: The poetics and politics of ethnography*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.  
(春日直樹・和邇悦子・足羽與志子・橋本和也・多和田 裕司・西川 麦子 (訳) (1996). 文化を書く 紀伊國屋書店)
- Creswell, J. W., & Clark, L. P. (2010). *Designing and conducting mixed methods research*. Second edition. Los Angeles, London, New Delhi, Singapore, Washington DC: Sage.
- Dixon, A.D., Champson, T. K., & Hill, A.H, (eds). (1995). Special issue: Portraiture methodology. *Qualitative inquiry*, 11(1).
- Emerson, R. M., Fretz, R. I., & Shaw, L. (1995). *Writing ethnographic fieldnotes*, University of Chicago Press.  
(佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋 (訳) (1998). 方法としてのフィールドノート：現地取材から物語作成まで 新曜社)
- 北澤毅・古賀正義 (2008). 質的調査法を学ぶ人のために 世界思想社
- Lawrence-Lightfoot, S. (1983). *The good high school: Portraits of character and culture*. New York: Basic Books.
- Lawrence-Lightfoot, S. (1995). *I've known rivers: Lives of loss and liberation*. Addison-Welsey Publishing Company.
- Lawrence-Lightfoot, S., & Davis, J. H. (1997). *The science and art of portraiture*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Marcus, G. E., & Fischer, M. J. (1986). *Anthropology as cultural critique: An experimental moment in the human sciences*. Chicago and London: University of Chicago Press.  
(永淵康之 (訳) (1989). 文化批判としての人類学：人間科学における実験的試み 紀伊國屋書店)
- Maxwell, J. A. (1996). *Qualitative research design: An interactive approach*. Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage.
- Maxwell, J. A. (2004). Causal explanation, qualitative research, and scientific inquiry in education. *Educational researcher*, 33(2), 3-11.
- Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study applications in education*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.  
(堀薫夫・久保真人・成島美弥 (訳) (2004). 質的調査法入門：教育における調査法とケース・スタディ ミネルヴァ書房)
- 宮崎あゆみ (1993). ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス：女子高におけるエスノグラフィー 教育社会学研究, 52, 157-177.
- 宮崎あゆみ (1998). ジェンダー・サブカルチャー：研究者の枠組みから生徒の視点へ 志水宏吉 (編) 教育のエスノグラフィー：学校現場の今 (pp.275-303) 嵯峨野書院
- 東京学芸大学教員養成とジェンダー研究会 (2013). 高校生男女の達成意欲における分極化と教師の支援のあり方に関する研究成果報告書
- Villanas, S. (1996). The colonizer/colonized Chicana ethnographer: Identity, marginalization, and co-optation in the field. *Harvard educational review*, 66(4), 711-731.
- Visweswaran, K. (1994). *Fictions of feminist ethnography*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

